
[2]暗黒武装鉄道結社[シュバルツァークロイツ](辺境の章)

双子の邪神様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「2」暗黒武装鉄道結社「シュバルツァークロイツ」（辺境の章）

【Nコード】

N68440

【作者名】

双子の邪神様

【あらすじ】

連邦を、亜空間連邦と十字教会に分裂させ、動きを封じる事に成功した暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツは、悠々と辺境地域の未開拓ブレイン郡へその手を伸ばす。

ブレイン（並行世界）の存在すら知らない未開の地を暗黒武装鉄道結社はどのように侵攻……もとい切り開いていくのだろうか……

この小説を読む前に、前章を読む事を強くお勧めします。

「反旗の章」

<http://nk.syosetu.com/n0819n/>

今回はシュバルツアークロイツの勢力圏である辺境地域で双子の邪神ラズロットとリズロットが中心の邪神無双ストーリーになるかも
……

情勢報告

> i 1 8 8 5 2 — 1 9 9 8 <

連邦議会選挙により連邦を掌握した政教分離主義勢力は十字軍の解体により十字教会の非武装化を強行、それに反発した十字教会は各地で武装決起し連邦領域の半分近くが連邦から独立する結果となった。

その混乱をつけ、政教分離主義勢力のトップであるジョージ トルーマンは連邦議会を再編成し、亜空間連邦を立ち上げ事態の收拾を計った。

これに対抗し十字教会側も教皇府を中心とした政府機関を発足させ、相互が睨み合う冷戦状態となっていた。

その冷戦状態を傍観するのが辺境地域を支配する暗黒武装鉄道結社シュバルツアークロイツである。

シュバルツアークロイツは、この冷戦により辺境地域への侵攻の脅威が薄れた事を利用し、未開拓の辺境地域のブレーンに勢力を拡大させ組織の地盤を固める動きを見せ始めていた。

十字教会はそれを阻止しようと、亜空間連邦に不可侵条約を申し入れたが、亜空間連邦にそれを拒否された事によりシュバルツアークロイツの勢力拡大を苦い顔で見守るしかできなかった。

着々と組織を強化し台頭する勢力になりつつあるシュバルツアークロイツと、睨み合いで身動きが取れない状態に陥いる亜空間連邦と十字教会はまさに対称的な状況となっていた。

暴走が産んだ災害魔法剣士（前書き）

ようやく神奈のメインウェポンである巨大な大剣（斬馬刀もどき）の完成です。

天然キャラにこれを持たせるとどうなるか……ニヤニヤ

暴走が産んだ災害魔法剣士

砂漠のブレーン

「カタルシア」

サラマドの街を出発したキンダーガルテン号は、サルカイ砂漠横断線を旅客列車が立ち往生している地点に急行していた。

サルカイ砂漠横断線は砂漠の激しい寒暖の差と、地盤の緩さが原因で線路が波打ち高速走行には向かない路線である。

通常の列車なら時速30キロも出せば間違い無く横転してしまうだろう。

しかし、キンダーガルテン号は、その劣悪な路線でさえも特殊な12輪台車に装備された量子コンピュータ制御の個別可動式油圧式サスペンション機構が軌道の歪みを完全に中和する事で、時速120キロという有り得ない速度で駆け抜ける事ができる。

空力を一切考えていない重装甲重武装の巨体で高速列車顔負けの速度（通常軌道の直線で時速350キロ）で走るのも化け物じみているが、更に劣悪な路線を全く気にせず爆走するその姿は正にモンスタートレインと呼ぶに相応しい。

「やっぱり魔力制御に難有りなのです……」

列車内では神奈が魔法の練習を続けており、それに付き合っていたラズロットがため息を漏らした。

武器に魔力を通し強化する所まではある程度順調だったのだが、魔力で身体能力を上げる練習でまたもや彼女の魔力が暴走したのだ。制御不能となった彼女の膨大な魔力は、その身体能力を際限無く増

加させ、持っていた刀では軽すぎて自分自身の目や感覚がその動きについていけなくなるという本末転倒な事態となってしまったのだ。

『きつと細かい作業が苦手だからなのだ。』

『不器用な上に、規格外の魔力……故に制御不能……厄介過ぎなのです。』

リズロットとラズロットはシンクロした動きで腕を組んで考え込む。

『自分の身体なのに制御不能とか意味分かんないし……』

自分の身体なのに上手くコントロールできないという事態に神奈はかなり苛立っている。

『せめて振り回す武器の動きを遅くできればいいのに……』

無理なのは解っているが文句を言いたくなる。

『……あ』

その時、何かを閃いた様にリズロットが顔を上げた。

『いい事思い付いたのだ　ラズも手伝うのだ！』

リズロットが唐突に魔力を具現化し武器の生成をはじめが、その顔は何かいたずらを閃いた子供の様な笑顔で嫌な予感しかない。そんな周囲の不安を余所に、リズロットは漆黒の巨大な大剣を無から創造し始めたがその巨大さは半端ではない……

刀身の長さは優に5メートルを越え、幅も90センチ近くある。
更に柄の部分には巨大な刀身とバランスを取るためのこれまた重
うな重りがついている。

ズドオオオン……

形が形成された漆黒の巨大な両刃の大剣は人が持つ武器とは思えな
い重々しい音をたて床に落ちた。

『ラズたん 魔力機構の付与と質量増加を頼むのだ』

『なるなる……その手があるですね』

リズロツトがやろうとしている事をラズロツトも理解したらしく邪
悪な笑みを浮かべる。

ちなみに何をしようとしているのかと言うと、高質量の巨大な剣で
有り余る筋力を抑えるというかなり乱暴かつ単純な手段である。

普通は思い付いてもやらないだが、二人は人が本来扱う事のでき
ない巨大な武器を通常の武器の様に振り回せれば災害レベルの破壊
力となり面白ろそうだという基準で実行に移したようだ。

実に身勝手極まりない……

神奈の魔法教育は本人が目指しているのは正統派の魔女ではなく、
双子の暴走により巨大な質量の塊を振り回す災害魔法剣士というお
もいつきり間違った方面……いや180度反対の方向へと突っ走り
始めていた。

それはともかくとして、ラズロツトが大剣に魔力を込めると、全体
に複雑で美しい紋様の様な装飾が刻まれ、魔王の魔剣さながらのま
がましい赤いオーラをその身に纏う。

『ちょ……デカすぎだつてこれ……』

神奈が頭を抱えたが、双子は早く剣を取るように促す。

『無理だつて……』

苦笑いしながら神奈が大剣にてをかけた……その時

ガコン

その重々しい大剣は軽々と持ち上げられた。

『……え？うそ……』

絶対に持ち上げられないとたかをくくって大剣を持ち上げてみたら意外と軽くもち上がり焦る神奈。

（落ち着け……落ち着け私……きつとこの剣は発泡スチロールでラズとリズが仕掛けた悪い冗談に……）

『発泡スチロールとは失礼なのです！』

『自然界では存在しないレベルの密度なのだ！』

神奈の心を読んだラズとリズが頬を膨らませ、その巨大な剣の凄さを主張するが、自然界に存在しない密度と言われてもピンと来ない神奈は首を傾げる。

『まあ、振ってみればわかるのだ』

リズロットの言葉に神奈は頷くと、剣を構え薙ぎ払ように振ろうと

した。

『あ……ちょっと待つのです!』

『え?あわわわ!』

バリバリガッシャーン

刀身の長さを考えずに大剣を振ろうとした神奈をラズロットが制止したが、一度加速した高質量の物体を止める事は難しく神奈はそのまま大剣に振り回さる様に一回転した。

……キンダーガルテン号の側面を破壊しながら……

『な……何事ですか!側面のダメージセンサーが反応………な……』

異変に気付き駆け付けたリタが車内の変わり果てた姿に啞然とする。両側の強化防弾ガラスのパノミックウィンドウは粉碎され、ミスリル合金製の窓枠と壁面は、ねじ曲がり切り裂かれている。

ちなみにキンダーガルテン号の壁面に使用されているミスリル合金製の装甲盤は、60センチ砲の鉄鋼弾の直撃を受けても傷一つ付かない代物である。

それを変形させ、なおかつ切り裂く事は通常不可能である。

『あ……えと……これは神奈がやったのだ……』

『ラズ達は悪く無いから向こう行ってるのです……』

いたずらが見つかった時の子供のように責任を神奈に押し付けどさくさに紛れて逃走しようとした二人だったが、リタが素早くその首根っこを掴み逃走を阻止した。

：

『さてと邪神様……詳しく事情を話して下さいね』

リタの顔は笑顔だが、眼が笑っていない。

『だって神奈が……』

『だって神奈が……』

この期に及んで見事にシンクロして言い訳をしようとした双子についてリタの最終リミッターが外れた。

『三人共そこに正座！今日という今日は絶対に許しません！！』

キンダーガルテン号内に響くヒートアップしたリタの声……

そしてラズロットとリズロットそして神奈の三人は、延々と続くリタのお説教を目的地到着までの間、涙目になりながら聞く羽目になるのだった。

非常に砂粒子が細かく、砂の海に例えられるサルカイ砂漠を横断するサルカイ砂漠横断線。

その砂の海のと真ん中で立ち往生する列車があった。

『また来たぞ！』

『しつこい奴だ……』

列車の窓からアサルトライフルを撃ちながら列車を護衛する傭兵達が叫ぶ。

その銃口の先には列車に向かってダイブする巨大なエイの姿をした魔獣の姿があった。

しかも、魔獣の硬い外骨格はアサルトライフルの弾丸をものともしていない……

『ダメだ！対戦車ロケット弾を用意しろ！！』

傭兵隊をまとめる隊長らしい男の命令で傭兵達はアサルトライフルの先にロケット弾をセットし構える。

対戦車ロケット弾の成型炸薬弾が着弾する際に発生するメタルジェットならば、硬い外骨格を貫通し内部を破壊する事ができる。

『今だ！ありつたけぶち込んでやれ！』

バシユッ

バシユッ

バシユッ……

アサルトライフルにセットされていたロケット弾が噴煙と共に打ち出され、魔獣に向かう。

『全部命中コースだイエヤアアア！！』

ロケット弾が全て命中する事を確信した傭兵の一人が奇声をあげてガッツポーズをとった。

しかし、ロケット弾が魔獣に突き刺さる瞬間、明後日の報告に進路を変える。

『なっ！！』

『ちい、魔法を使う奴なんて聞いてないぞ！！』

ロケット弾の進路を変えたの矢の進路を変えて身を守る魔法そのものである。

また、カタルシアに存在する魔獣にはジマラ山脈に棲息するものを除き、魔法を使う高等種は確認されていない。

つまり、本来サルカイ砂漠でこの様な高等種に遭遇する事など有り得ないのだ。

『ツイて無いぜ全くよお……』

『おい！ボサツとしてないで伏せろ！！』

次の瞬間、急降下し列車をかすめた魔獣の身体に車体の上半分がもつていかれた。

シュバルツアークロイツの戦闘用の頑丈な列車ならこうはいかないが、残念ながらこの列車は戦闘など考慮されていない旅客列車である。

『クソッやつてくれるぜ！』

『救助はまだ来ないのか？』

傭兵達の苛立ちはピークに達していた。

その時……

パアアアン

勇ましい3連ホーンの空笛を鳴らしながらキンダーガルテン号が姿を現した。

異界の門？（前書き）

今回から異世界からの使者の少女が登場します。

異界の門？

巨大なエイの様な魔獣にまたがる少女……

淡いピンク色のツインテイルの髪と瞳、紺色の生地に控え目に施された金の刺繍のマント着きの服に青白い肌が映える。

年齢は15歳に見える。

彼女は、何日にも渡る魔法の儀式により作り出された異界の門を通りこの異世界にやってきた。
カタルシアブレン

『ホントについて無いわね……出た傍から異界の魔物に襲撃されるなんてね……まあいいわ、邪魔する奴はぶっ飛ばすわよ！』

そういうと、彼女は魔獣をダイブさせ、異界の魔物に急降下させる。

魔物はそれに合わせ、鉄の塊の様な矢を放ってきたが、彼女の操る魔獣はこの程度の攻撃ではびくともしない。

『魔獣の癖に生意気なのよ！』

少女が油断したその時、

バシユッ

バシユッ

バシユッ……

さつきよりも大きな鉄の塊が魔物から放たれた。

『……っ！守りの風よ！』

反射的に守りの風の魔法で、鉄の塊の進路を変える。

外れた鉄の塊は、地面に落下すると爆笑した。

火球の魔法が炸裂したくらいの威力だが、魔力が一切感じられない。

不思議に思いながらも彼女は更に魔獣を急降下させ魔物に近づける。その時、彼女は魔物の身体が一部透けていて、その中に沢山の人がいる事に気が付いた。

『魔物に食べられたんだ……助けなきゃ！』

彼女の乗る魔獣が急降下しながら速度を上げていく。

『いつけえええ！！』

ガシヤアアアン……

魔獣の硬い外骨格が魔物の身体の一部をえぐりとった。

『あの魔物はそれほど硬くないようね……ちゃっちやと片付けるわよ！……！』

ギユオオオオ！

彼女の命令に魔獣が咆哮で答えた。

その時……

パアアアアン

遠くの方から咆哮を上げ高速で近づく新たな魔物の姿があった。

全身が頑丈そうな殻で被われ、今戦っている魔物より遥かに強そう
だ。

『強そうなのが来たわ、ギユオ、油断しちゃダメだからね！』

ギユツ！

ギユオと呼ばれた魔獣は短く吠え、同意の意思を示す。

『魔力反応確認、魔力ランクE、一致する反応パターン無し……。』

魔力センサーが検知した反応パターンをデータベースと照合した結果をリタが告げる。

『一致するパターン無し……。未知の魔法技術の産物の可能性は？』

『可能性は限り無く低いですね……。極めて原始的な技術を使用して
いる様なので、古過ぎてデータベースから抹消されたパターンと推
測するのが妥当でしょう。』

照合結果から、未知の魔法技術の可能性を疑う分析担当のプッペイナに対し、リタはその可能性を否定した。

理由は魔獣を制御する際に発生する魔力信号のパターンが単純かつ原始的なものだからである。

『それにしても、あのエイみたいなの……どこぞの荒ぶる海の邪神そっくりなのです』

『これで金色のドラゴンが出てきたら怪獣大決戦なのだ』

『邪神様……そのネタは解る人が少ないかと……』

その脇で、とあるマイナーなゲームのネタを出した双子にメタなツッコミを入れるリタだが、列車の武装を準備するのは忘れない。キンダーガルテン号の主砲である2連装の30センチ魔導メーサーカノン砲が唸りを上げ回転し、魔獣を射線上に捕らえる。

『魔導メーサーカノン砲、拡散モード！』

『拡散モード、準備オツケーだよ』

リタの命令にプッペイナ達は的確に動き応える。

彼等は普段どこか抜けている様なふざけた言動をとっているが、戦闘時には素早く正確に動く。

そこは、さすがは魔導人形と言ったところか……

『魔獣がこっちに向かって来たよ！』

『列車から引き離す手間が省けたね。』

『弹幕張るよ』
□

魔導メーサーカノン砲からマイクロウェーブの光が放出される。
拡散モードなので円錐状に広がる。

実はこの拡散モードは、通常の魔導メーサーカノン砲には無いモードである。

理由は拡散する事で出力が分散し威力が著しく低下するため、通常の戦闘列車の機関出力では十分な威力が得られないからである。

しかし、運用コストを一切考えず設計されたキンダーガルテン号の無駄に強力な機関出力ならばこの拡散モードでも十分な破壊力が得られる。

そのため、この列車のオリジナル機能として採用されているのである。

この広範囲に広がるマイクロウェーブが命中すれば魔獣は一瞬で内部が沸騰膨張し、内圧で硬い外骨格が破裂する。

外骨格が破裂しなくても高まった内圧で臓器が圧迫されもしくは、中身が焼肉になり絶命する事になる。

電子レンジでゆで卵を作ると爆発するのと同じ理由である。

迫り来る光……

ギユオに跨がる少女は、直感的にその危険性を察知し、ギユオを急上昇させて光の弹幕から逃れた。

『危なっ……何なの今は!』

眉を寄せる彼女の目線の先には、光を浴び融解する巨大な岩や弾けて肉片になる不運な小動物達の姿があった。

謎の攻撃を前に、迂闊に近寄るのは危険だと判断した彼女は、高度を取り様子を見ようとした……その時、

ボンッ……バシユウウ……

蛇の様に長い魔物の頭から噴煙をあげる何かが飛び出し、うねりながら向かって来た!!

『ギユオ! 避けて!!』

彼女の命令に反応しギユオが急旋回し、回避コースをとる。

しかし謎の物体は、まるで意思を持っているかの様に、再び衝突コースに進路を変える。

『Uターンして振り切って!』

『ギユッ!』

ギユオはUターンし、謎の物体を振り切るために急加速する。

しかし、ギユオと謎の物体の距離は徐々に詰まってい……そして命中……しようとした瞬間、

ギユオは身体を捻り物体をやり過ごした。

しかし……

ボンッ……

物体が爆発し、中に仕込まれていた金属片を撒き散らした！

『かはっ！！』

ギユオの上で、回避に成功し、安堵の表情を浮かべた彼女の顔が一瞬で苦悶の表情に変わった。

撒き散らされ破片の一つがギユオの身体を突き抜け、彼女の腹に食い込んだのだ。

硬い魔獣の身体により威力が殺されているとはいえ、柔らかい彼女の身体にめり込み臓器を引き裂くには十分な威力だった。顔を歪め痛みに耐える彼女の腹部に血が滲む。

そして、彼女は意識を失い、魔獣にしがみつく力を無くしたその身体は風に流され空中に投げ出された。

『近接信管作動……破片によるダメージ確認！』

『魔獣はきりもみ状態で落下中……あ……魔獣から分離する魔力反応……人が乗ってたみたい……』

『反応パターンは魔族……どうする？リタ……』

『シュバルツアークロイツ交戦規定No.30』暗黒種族登録種保

護」を適用、救助対象と認定……それでは、私と神奈及び邪神様で魔族の救助、残ったプッペディナのみで旅客列車の救助活動をそれぞれ行います。』

『

プッペディナ達の報告を受け、リタが次の指示をだした。

通常は車内に待機させるべき双子が、魔族救助メンバーに入っているのはかなり問題だが、車内で待機させた場合、好き勝手に行動され事態が悪化する事は確かである。
そうなるくらいなら、近くで眼を光らせておいた方が良いというリタの判断だった。

『邪神様、くれぐれも悪ノリで事態を悪化させないように……』

『解ってるのです……』

『リタはうるさいのだ……』

釘を刺すリタに双子達はふて腐れた様に答える。

その姿はまるで子供（外見は子供だが……）、とても2000年以上を生きた神とは思えない。

その様子を見る限り、おとなしくしている気は無いようだ。

当然リタもそれに気付いているが、いつもの事なので余り気にしない。

要は、双子達が好き勝手に動くのを前提にした事態を想定していれば良いのだ。

既にリタは、現段階で双子達が暴走した場合を想定し、旅客列車から双子達を離れさせるため魔族救助メンバーに入れている。更にリタ自身が監視するという念のいれようである。

それはさておき、ラズロット、リズロット、リタ、神奈の4人は走る列車のハッチ（キンダーガルテン号はドアの代わりにハッチが付いている）から飛び出した。

双子達は背中に生えている悪魔の様な羽で飛行する。

リタは神奈を吊り下げ、る様に両手で支え、背中に装備された飛行ユニットを展開し双子達を追いかける。

ズウウン……

4人が向かう先に魔獣が墜落し砂煙が上がった。

彼女が失った意識を取り戻したのは砂の上だった。状況が掴めず周囲を見渡すと少し離れた場所に魔獣の巨体が横たわっていた。身体のあるところに、さっきの破片が突き刺さり、そこから体液が流れ出している。

まだ生きているらしく、もがき苦しむ様に身体をくねらせている。

『ギョオ！……っぐ……』

魔獣の名前を呼び立ち上がった彼女が腹部を押さえうずくま

る。

腹部には、破片が深々と突き刺さりそこから血が滴り落ちていた。彼女は大きく息を吸い込むと、その破片に手をかけ引き抜こうと力を入れる。

その瞬間激痛が走るが、彼女はその力を緩めず、目に涙を溜め更に力を込める。

破片は引き抜かれ……痛みで飛びそうなる意識を踏み止まらせ、魔法で傷口を塞ぎ彼女はラル（魔獣）の元に駆け寄る。

『ギユウ……』

彼女の姿を見たラルは、力無く吠える。

直ぐに治療してやりたい所だが、この魔獣は対魔法用である為、一切の魔法が効かない。

無論、回復魔法も効果は無い。

故に、攻城兵器で攻撃されてもヒビ一つ入らない硬い外骨格の鎧で身を守っていたのだが、異界の魔物の攻撃は、あっさりとその守りを打ち碎いた。

『攻城兵器の直撃を受けてもびくともしないはずなのに……』

目の前の光景に唖然とする彼女だったが、近付く4人の気配を感じ取り、戦闘体勢をとる。

『あれっぽいのだ』

地面に横たわつる全身が殻で覆われた巨大なエイを指さし急降下するリズロットに、ラズロット続く。

『邪神様、何故に急降下爆撃コースを……』

リタは、嫌な予感しか感じていない……

双子がこのような行動を取る時は、大抵事態を悪化させる、その証拠に双子の顔は何かイタズラを思い付いた子供の顔である。

『神奈さん、これよりあなたを目標地点に投射します。』

着地したら迷わず邪神様に向かって剣風を飛ばしてください、時間が無いので、理由は後で説明いたします。』

『何か良く判ないけど、リタの判断なら間違い無いだろうし従うよ。』

リタの提案を快く承けた神奈は、リタの投射に耐えられるように体勢をとった。

次の瞬間、リタの腕のアクチュエータが唸り、まるで投石機のように神奈を投げ飛ばした。

砲弾に近い初速、普通の人間なら加速時のGで押し潰されてしまうのだが、暴走する魔力で強化された彼女にとっては、その程度のGは少し押された程度でしかない。

神奈の身体は、カノン砲の直射と同じ弾道を描き、目標のやや前方に着弾するコースで飛行する。

その上空では、双子達がポケットからハバネロソースの入った瓶を取り出している姿が確認できた……。

地面が迫り、神奈は身体を捻り着地体勢をとる。

足が地面と接触し、地面削りながら滑り目標地点丁度で止まった。

足にかかった衝撃は相当なものはずなのだが、やはり暴走する魔力で強化された彼女には何の影響も無いらしく、当初の予定通り振り向き様に、双子に向かって剣風を飛ばした。

ぶおんという重い風切り音と共に放たれた剣風は、急降下中の双子達に襲い掛かり、今まさに投擲しようとしていたハバネロソースの入った瓶を粉碎した。

更に不幸な事に、瓶から撒き散らされた中身が双子達の顔面に直撃

……

『ひぎゃああ！目が！目があああなのです！』

『目があああなのだ！！』

顔を押さながら、どこぞの人気アニメに登場する某大佐の様な台詞を叫びながら引き起こしをする事ができず、急降下を続け、ズドンという爆音と共に地面に突っ込み、二本の水柱ならぬ砂柱をあげる。その砂柱の間を通りリタが現れ、何事も無かったかの様に神奈の前に着地すると、

『間に合った様ですね。』

と、地面に見事にダイブした双子を全く心配している様子はない。

『あの……二人とも見事に突っ込んだみたいだけど、大丈夫かな……』

…」

さすがに、墜落の原因を作った神奈は心配しているようだが、リタはその肩を叩きこつ告げた。

『まあ、あの二人は頑丈ですからあの程度で怪我をする事はないでしょう。』

そのリタの様子から、これは日常茶飯事の事だと理解した神奈は、背後に身構える少女に注意を向けた。

振り返るとそこには、魔法の杖を構えた少女が敵意剥き出しで身構えていた。

異界の門？

砂の上に横たわるエイの様な魔獣を庇う様に緑色の魔法石をちりばめたメイジスタッフ（魔法の杖）を構える少女と、まがましい魔力を纏った漆黒の巨大な剣を構えた神奈が対峙する。

その脇では、クレーターから目を回しながらはい上がってきたラズロットとリズロットを叱り付けるリタの姿がある……

そのためか、少女と神奈の緊迫した状況にも関わらず、その場の空気に緊張感のカケラも感じられない。

『あんた達、何者なの？返答次第ではボコるわよ！！』

『私は崎守 神奈、その双子の邪神様に魔法を習う身で、その双子を叱っているのがその世話役のリタ オプテラさんです。』

『ふ〜ん、私はラスティー ノワルよ。』

……それにしても嘘はもつと上手くつきなさいよね。

あんなチンマイのが伝説の邪神な訳ないじゃない！！』

どうやらラスティーは、神奈の説明が嘘だと判断してしまったらしい。

実は彼女の世界には、魔族の危機を救った邪神の伝説が語り継がれているのだ。^{フレン}

長い年月をかけて美化された邪神伝説を聞かされてきた彼女の持つ邪神像と、目の前の双子とのギャップは掛け離れたものだ……。

『まあ……このお二人が神に見えないのは事実ですが、一応最上位の暗黒神に入るお力を持っていちゃいますよ。』

双子を叱り付けながら会話を聞いていたリタが、話しに割り込んできた。『神に見えないとか失礼極まりないのだ!』

『一応とかどういう意味ですか!』

そのリタの説明に頬を膨らませ反論する双子、やはり偉い神様には見えないというか、わがままな子供そのものである。

『だって見えないし……』

ラスティーの指摘はごもつともだが、完全にバカにされたラズロットとリズロットは完全にシンクロした動きで彼女を睨みつけ、

『なら証拠を見せるのだ!』

『あの魔法が通じないエイモドキを瞬時に治療してやるのです!』

と、ラスティーの心を読んであの魔獣に魔法が効かない事を知っていた双子達は、その魔獣を瞬時に治療して、神であることを証明すると言い出した。

どうやら双子達は完全に頭に血が上り、怒りに任せて行動している。

『邪神様! 落ち着いて下さい!! よりにもよって魔獣を……』

『うるさいのです!-!』

『神様はナメられたら終わりなのだ!』

『何もたついてるのよ……実はできないと言っんじゃないでしょうね!-!』

プチッ（双子達の何かが切れた音）

『むきやああああ!!』

何とか双子をなだめようとするリタだったが、ラストイーの最期の挑発がトドメとなり双子はシンクロして奇声を上げ、完全にプチ切れモードとなってしまうた。

『今やる所だから、黙れなのです!』

ラズロットは苛立ちながら、右手をリズロットに差し出し、それをリズロットが掴む。

すると、辺り一帯の地面が半透明となりグリッドが表示され、至る所に謎の文字列が流れる半透明のボードが浮かぶ不思議な空間が構築されていく。

『ロウビルドゾーン（法則製作空間）……邪神様！それは秘匿能力です、迂闊に使っては……』

それを見たリタは慌てて止めようとするが、双子達はそれを無視し謎の空間の構築を続け、ついにコーンと言う堅い不気味な音と共に空間構築が完了した。

次に双子達は魔獣の元に歩み寄り、それに軽く触れた。

魔獣の身体がワイヤーフレームの様な表示となり、更に無数のボードが表示される。

ボードには、謎の文字列そして振動する紐の様なものの集合体が表示されている。

ラズロットは文字列のボードを、リズロットは紐が描かれたボード

をそれぞれ自分の近くに集め、ボードを、タッチパネルの様に操作しはじめる。

すると、ワイヤーフレーム表示となった魔獣は、パーツ毎にバラバラなり、破損したり欠損した部分がみるみる間に修復され元通りになっっていく。

その様子を神奈とラスティーは啞然とした顔で、リタは呆れた顔で見守る。

その間にも魔獣の修復は進み、組み立て作業に移っている。

双子達は無言のまま黙々と作業を進めているが、不思議な事にお互いが何を考えているのかが解るかの様に完璧なコンビネーションで手早く作業を進めていく。

そして、魔獣のパーツが組み上がった所で、魔獣の上に一際大きなボードが浮かび上がり、赤い色の文字列が表示され、次々と青色に変わっていく、全ての文字列が青色に変わった瞬間に、ボードは溶け込む様に消滅し、魔獣もワイヤーフレーム表示から通常表示に戻り、元通り元気に動きだした。

『いったい、何をしたんですか？』

目の前の光景に頭が完全に追いついていない神奈が双子達に説明を求めたが、双子達は『壊れた所を直しただけ』としか答えなかった。

『これで、ラズ達が神様だって信じたですか？』

構築したロウビルドゾーンを元に戻しながらラズロットは得意げにラスティーを見る。

『な……なかなかやるじゃない……まあこれぐらい当然よね。』

強がってみせるラスティーだったが、さっきは見事に驚き啞然としていたのは確かである。

『おもいつきり驚いてた癖なのだ』

当然リズロットがそこをからかい気味につつつき『うるさい！こんな程度で私が驚くわけないでしょ！』と怒鳴り付けてごまかそうとした彼女だったが、双子達には火に油でしかない。

『きやはははは ツンデレなのです』

『ツンツンモードなのだ デレはいつくるのだ』

当然ながら双子達は更に彼女をからかいはじめる。

『黙りなさい！何よそのツンデレって言うのは！！』

『ツンツンなのです』

『デレはまだらしいのだ』

『あ！この、待ちなさい！！』

怒りをあらわにするラスティーを逃げながらからかい続ける双子達……そして更にヒートアップしながらそれを追いかけるラスティー……

その様子を見てため息を漏らすリタ……

『ギユウ……』

同情する様に鳴き声をあげる魔獣……

ダメな主を持つ者同士、少しでも心が通じ合えた気がしたリタだった……

『デレ来いなのです』

『ツンツンツンなのだ』

『待ちなさい！この〜！〜！』

異界の門？（前書き）

久しぶりの更新です。

ようやく辺境の章の方向性が定まりました。

一応今回登場する組織は、某白い悪夢が所属する管理局とは全くの別物です。

（元ネタだろうと言われると何も言えませんが・・・）

異界の門？

破損した旅客列車の復旧作業を行うキンダーガルテン号。

その車内では、ラステイーが双子、神奈、リタの4人に事情を説明していた。

本来ならば、言語の壁が立ちはだかるのだが、リタの翻訳能力のおかげで、問題は無いようだ。

『要約すると、貴女はアーシェリアという世界のノワルニア王国の第一王女で、国の危機を邪神様に助けてもらうためにここへやってきた・・・そこに、たまたま通りかかった旅客列車を魔物と間違え攻撃したという事ですね。』

一通りの事情を聞いたリタは、その内容を要約し間違いが無いか確認する。

理由は、双子達が（わざと）誤解し、事態を複雑化させることを防止するためである。

『しょうがないじゃない！あんなトロツコの化物みたいな乗り物、アーシェリアにはないし。』

呆れ気味に話すリタの態度が気に食わないのか、頬を膨らませるラステイ。

『確かに軌道内への侵入は非常識ですが、鉄道の無い世界の住人にそれを言ってもしょうがないですからね・・・』

その様子に気付いたリタは、捕捉の説明で、彼女をフォローしようとしたが・・・

『鉄道がないとか、シヨボ過ぎるのだ・・・』
『きつと、原始時代並みの世界なのです』

KY邪神コンビがそれを見事にぶち壊す。

もう少し状況を見て発言してほしいとおもいながらも、悪気がないのは判っているので、それを綺麗にスルーし捕捉を続けるリタ、とてもAIとは思えない大人な対応である。

『アーシェリアの文明レベルは中世期程度、ブリザッド運行管理局管轄のブルーネ局地戦略路線ブルーネ局地ターミナル駅付近に位置し、今後の辺境地域制圧の重要拠点のひとつとして、近々侵攻予定・・・』

捕捉説明を終えた、リタはため息をつき結論を述べる。

『この様子だと、あと数ヶ月で、貴方のノワルニア王国どころか、アーシェリアの全ての国が地図から消えますね・・・残念ながら・・・』

『ちょ・・・それどういう意味!』

『全ての国が無くなるとか、意味わかんないし!』

リタの物騒な結論に、ラスティーが食ってかかったのは、当然の反応だろう。

彼女は、アーシェリア意外の並行世界（ブレーン）を知らない。
一応彼女は、異界の門を使い並行世界に渡りはしたが、邪神の住む神の世界に渡ったというていど認識なのである。

『それを説明するには、まず並行世界についての説明が必要なよう

ですが、長くなりそうなので後ほど詳しく説明いたします。』

『まずは、今後の対応について邪神様にご判断して頂きます。』

ラスティーへの説明は後回しにして、リタは、双子に今後の対応について尋ねた。

これに対し双子は、

『助けを求めて来たのなら、それを最大限利用すれば良いのです。』

『フラウなそうするはずなのだ。』

・・・と、既にどう対応するかを決めており、ラスティーの国を助ける方向で動くつもりようだ。

まあ、暗黒武装鉄道結社としては、物流を完全に支配してしまえば、わざわざ面倒な国の運営に手を出す必要性は無い。

今回は、その受け入れ窓口となる国が無かったため、やむを得ず武力侵攻を計画していたのだが、受け入れ窓口となる国が見つかったいま、利益の出ない武力侵攻よりも武器や物資の売買で、利益を出しつつ侵略が行える、物流侵攻を選ぶのは民間鉄道会社として当然の選択である。

『了解しました、それでは物流侵攻の窓口候補が見つかった旨を、本社に報告しておきます。』

『後は、事前調査と滑走軌道の準備ですね。』

『なんか引つ掛かるんだけど・・・』

釈然としない様子のラスティーだったが・・・

『気にしたら負けなのだ』

『それより、ラスたんは帰りの手段とかちゃんと準備してるですか？』

双子はそれをいつものノリで押しきると、次の動きのための話に切り替える。

『当然よ、術式の準備に3日、展開に1日、5日目で帰れるはずよ！』

驚いたかと言わんばかりに自信満々のラスティーだったが、リタはそれを一瞬でへし折る。

『キンダーガルテン号だとターラン国際ターミナルステーションまでの移動で12時間、その後の燃料と物資の積み込みで1時間、ブルーネ局地ターミナルステーションまでの移動で34時間、そこに展開中の第3列車総隊所属のブルーネ列車隊との合流した後で、全行程で3日あれば十分かと思われます。』

スピードを強調した移動行程を説明し終わったリタは、ラスティーを見た、しかも完全などや顔で・・・

どうやら、シヨボい技術を自信満々に説明するラスティーの態度が気に入らなかつたらしい。

しかし、ラスティーは折れる事なく反撃にでる。

『そんな長い間乗り物で移動したら腰が痛くなっちゃうじゃない！』

それに対しリタは、

『数日がかりの儀式で、憔悴する愚行を冒すより遥かにマシかと思われますが。』

と、反撃・・・

・・・そしてにらみ合い

『あ・・・あの・・・』

そんな二人の険悪なムードに戸惑いながら、神奈が話しに割り込んだ。

『ラスティーさんの国は危機的状态なんですよ、なら少しでも早く駆けつけた方がいいと思う。』

神奈の正論にラズロットは頷き、

『神奈さんの言う通り、所要時間は短い方がいいのです。』
とリタ案に賛成する意思を示した。

ラズロットも頷きそれに同意する。

『それに、リズ達は、お家以外で寝泊まりしたく無いのだ。』

リズロットが言う家とは、勿論キンダーガルテン号の事である。

双子達は、常にキンダーガルテン号を拠点に活動しており、当然普段から当たり前の様にそこで寝泊まりをしている。

そのため、キンダーガルテン号の内装は、走る5つ星ホテルと言われるほど豪華な作りで、居住性を最優先に設計されおる。

その快適過ぎる居住空間に慣れきってしまっている双子達は、この列車意外での宿泊を極端に嫌がるのである。

『邪神様の意向により、キンダーガルテン号の移動とします。』

何かご質問はございますか？ラスティー殿下 』

『うぐぐぐ・・・』

プライドを傷つけられたラスティーは恨めしそうに勝ち誇った表情で彼女を見下すリタを睨み付ける。

『ねえ・・・リタってあんな性格だった？』

『リタは仕切りたがり屋さんなのだ。』

だから、同じ仕切り屋さん属性のラスたんと同属嫌悪してるだけだとおもふのだ。』

『アンドロイドなのに人間臭いんだねリタって・・・』

『何か言いましたか？』

ひそひそ話しをしていた神奈とリズロットは慌てて首を横にふった。

それはともかく、修理を終えた旅客列車を連結したキンダーガルテン号は、推進運転（機関車が客車を推してバック状態で走ること）で元来た道を帰っていくのだった。

魔法都市

「ポポリアス」

魔法都市ポリアスは、数千キロ四方の小さなブレインに存在する高層建造物が立ち並ぶ近代的な景観を持った魔法技術が極めて発達した巨大都市である。

そして、その都市の中心には、特殊な目的で設立された機関の本部局舎が存在する。

『次元震動確認!!』

『座標軸特定モニターに出します。』

『アーシェリアから管理圏外への一時的なゲート展開が原因と考えられます。』

その本部署内にある円形の広大なミッションルーム中央でオペーターの報告を微動だにせず聞く初老の男の姿があった。

軍服に身を包んだ白髪その男は、ゆっくりと立ち上がり、モニターに表示された情報を確認する。

彼の名は、グレン ポートマン。

この、亜空間の秩序を維持管理する事を目的に設立された巨大組織『亜空間管理局』の局長である。

『管理圏外・・・あの亜空間列車が出没する地域か・・・厄介な・・・』

亜空間管理局は13年前にシュバルツァークロイツとの戦闘を経験していた。

彼らの知らない事だが、その時の戦闘に参加した列車隊は、後方を守るために、第3列車総隊が申し訳程度に配置していた、5編成程度の部隊でしかなかった。

しかし、この衝突で亜空間管理局は派遣した部隊が全滅するという大損害を出し、その後その一帯は非干渉空間とされ管理圏外と呼ばれる事となり現在に至る。

グレン局長は、今回の件が管理圏外を刺激し最悪の結果を招く事を恐れていた。

『ヒューズを局長室に來させる！！』

下手をすれば13年前の悪夢が繰り返される事になる！！』

グレン局長はそう言うと、足早にミッションルームを出ていった。

異界の門？（後書き）

下手にてを出すと恐ろしい結果になる巨大組織、それが暗黒武装鉄道結社シュバルツアークロイツ（民間鉄道会社）。

次回からは、グレン局長のお友達は胃薬になりそうです。

二人の侵入者（前書き）

シュバルツァークロイツの組織は、大きくわけて、総帥が直接指揮をとる運行管理局と、総元帥を介して間接的に指揮を取る防衛局の二つに別れています。

運行管理局は、列車の運行管理や各路線の保線から、ステーション周辺の治安維持など、主に平常時の業務がメインで、防衛局は、各列車総隊等の戦闘組織の管理、運用や戦闘列車等の兵器開発等の侵攻や防衛がメインになっています。

二人の侵入者

常闇の港湾都市群

ブルーネ

ブルーネは元々日の光の差さない漆黒の闇と水しか存在しない小さなブレーンだった。

しかし、シュバルツアークロイツがここに無数のメガフロートの島を浮かべ始めると、光が常闇を照らす夜景の美しい港湾都市群となった。

更に海底に眠るミスリルやマナルの鉱脈を採掘する、海上の採掘基地と港を結ぶ貨物船の貨物の積み降ろし用の巨大な港湾施設やその貨物を他の世界に運ぶ巨大な貨物ターミナル駅が存在する。

しかし、仕事を求めてやって来る人々の玄関であるはずのテーションは未だに局地ターミナル規模であり、増加し続ける列車にパンク寸前の過密発着ダイヤで半ば通過型ターミナル状態での運用を余儀なくされていた。

そんな中でも例外は存在する。

普通列車から快速列車までを捌く通常ターミナルとは別に、特急列車や特別列車専用の特別ターミナルがあった。

通常ターミナルの列車は、停時間20から30秒程度で次の列車のために慌ただしくホームを開けるのに対し、特別ターミナルの優等列車は短て30分、長いときは数時間近くホームに居座る事もある列車にも平民と貴族のような身分の違いがあるかのような扱いの違いである。

そんな優雅な停車中の優等列車の中にキンダーガルテン号の姿もあった。

サルカイ砂漠横断線を推進運転で、引き返したキンダーガルテン号は、サラムドターミナルステーションで救助した旅客列車を切り離

した後、スイッチバック用軌道でスイッチバックし進行方向を元に戻す。

その後、ジマラ山岳線を豪快にスラッジ音を響かせながら爆走し、ターラン国際ターミナルステーションで燃料と物資を補給し、亜空間軌道本線へ入線。

亜空間軌道の本線から分岐するブルーネ局地戦略線に入りブルーネ局地ターミナルステーションに向かうという、所要時間約45時間の強行スケジュールをこなしていた。

この後、予定は簡易点検と補給を行い、侵攻準備中だったブルーネ列車隊を引き連れてアーシエリアに乗り込むだけである。

しかし、第3列車総隊の戦闘車輛は魔導蒸気機関車が牽引する。つまり、出発前の調整に時間がかかるのだ。

更に、運行管理局の保線部が用意する亜空間シールドマシンの到着が遅れているため、出発まで12時間近く時間があるようだ。

『出発時刻までには必ず戻って下さいね。』

ホームにはラズロット、リズロット、ラストイー、神奈の4人を見送るリタの姿があった。

まあ、12時間もあれば、双子達が街の見物がしたいと言い出すのは当然だろう。

4人を見送ったリタは、やれやれといちゃ具合に首をふると、再び自分の仕事に戻っていった。

『なんだこれは！！』

ブルーネ局地ターミナルステーション通常ターミナルのホーム階段

入口のど真ん中で立ち尽くす、黒レザーパンツとジャケットにサン
グラスの金髪男が1人。

彼の名はヒューズ レイン、亜空間管理局のエージェントだ。

彼が啞然としているのには訳がある。

亜空間管理局は、各世界固有の文明や文化を保全し世界の多様性を
維持する事を目的として活動する機関である。

当然、暗黒武装鉄道結社が行う亜空間軌道事業は、彼らからすれば
完全な犯罪行為である。

そんな犯罪行為が、目の前でしかも20秒間隔（各乗り場毎）で堂
々と行われている光景を見れば、彼以外のエージェントでも同じ反
応をするだろう。

『4番乗り場到着の列車はノースブリザッド鉄道のブリザッド国際
ターミナルステーション行きの区間快速です。停車時間20秒とな
っておりますお急ぎ下さい。』

『続きまして3番乗り場到着の列車はグリーンロンド電鉄のフォレ
ストフォート行きの準急です。停車時間30秒となっておりますお
急ぎ下さい。』

ホームには、マイク片手に、ひっきりなしに到着と発車を繰り返す
各鉄道会社の列車のアナウンスを忙しくこなす駅員の姿があった。
シュバルツァークロイツの路線を走るのはシュバルツァークロイツ
の列車だけではなく、旅客事業や貨物輸送を請け負う下請け事業者
が多数存在しているのである。

当然、それだけ過密ダイヤとなり、駅周辺の軌道は列車が渋滞して
いる。

それを捌く駅員の負担は半端ではない。

そこへ・・・

『おい！貴様！！』

ヒューズが駅員の肩を掴み強引に引き寄せた。

『うわっ、危ないじゃないですか！』

列車の案内でしたら総合案内窓口へいつてください！忙しいんですから。

4番乗り場の列車、ドアが閉まりますご注意ください。』

駅員は忙しいから邪魔するなと言わんばかりの旧国鉄よろしくな対応をすると、再びマイク放送を始める。

『おいっ！！ツ~~~~っ』

その対応で頭に血が上り、駅員に詰め寄ろうとしたヒューズだったが、その瞬間後頭部を強打され頭を抱えしゃがみこんだ。

彼が振り返ると、そこには赤く光る目をした色白の14歳くらいの長い黒髪の少女がいた。

ジーンズのホットパンツに白いシャツその上から麻の質素なマントを羽織っている。

よくみると露出した関節部分に球体関節人形のような継ぎ目があり、彼女が人間では無い事がわかる。

彼女はプリッペアという名前の魔力式機械人形である。

『婆さん、いきなり殴るこたあねえだろうが！』

『こうでもせんとお主は止まらぬからのお。』

それに、局長の命令を無視していきなり騒ぎを起こすお主が全面的

に悪い。』

頭を擦りながら抗議するヒューズだったが、彼女は全く悪びれる様子はない。

まあ、彼女は稼働開始から60年近く稼働し続けているため、外見はともかく年齢的には、彼より上なのである。

彼女はとある亜空間犯罪を繰り返してきた研究機関で生まれた魔法文明と機械文明の叡知の結晶である。

しかし、亜空間管理局の摘発により研究機関は消滅し、現在では彼女を生み出す技術はロストテクノロジーとなってしまった。

しかし、彼女は亜空間管理局で行える簡易的な整備のみで現在まで稼働し続けているのである。

『じゃあどうするんだよこれ！！』

『ここは亜空間管理局の力の及ばぬ場所ゆえ、摘発するわけにもいかぬであろう。』

下手に騒ぎを起こせばわしらが犯罪者にされかねん。

任務はあくまでアーシェリアから迷い込んだ者の強制送還だけじゃ。

』

『ちっ、分かったよ。』

確かに喧嘩売るにはヤバそうだからな。』

ヒューズはそう言うとき空を見上げた。

そこには、蒸気機関車に引かれ上空を移動する戦闘列車の集団がいた。

『13年前の物より遥かに強力になっておるようじゃな。』

わしは特別ターミナルを当たる、お主は引き続き普通ターミナルじ

や。』

『うい。』

やる気の無い返事をしたヒューズはホームの人込みに消えていった。それを見送ったプリツペアも特別ターミナルへ向かい歩き出した。

『凄い人・・・王都でもこんな人混み見たことないわ。』

リタと別れたラズロット、リズロット、神奈、ラスティーの4人は、普通ターミナルを抜け、駅前のショッピングモールで買い物を楽しんでいた。

ショッピングモールはアーケード街になっていて、両サイドに商店が軒を連ね、中央のブルーネ局地ターミナルから居住地区まで延びる路線の併用軌道が走る広い歩道を挟む形になっている。

併用軌道を通る列車は時速10km程度の速度で、ドアを開放したまま徐行運転をする。

当然軌道は渋滞状態になるが、ドアが開放されている状態なので、自由に乗り降りができる動く休憩所となっている。

実はこのショッピングモール専用の路線は乗車料金が不要なのである。

そのからくりは、ショッピングモールの運営組合が、この路線を運営しているからである。

この無料の路線は多くのお客を呼び寄せ、路線維持費を補填しても余りある利益をショッピングモールにもたらし、更に物資輸送にも重宝されている。

『ラズ、リズ・・・』

何かに気が付いたのか、それまで楽しそうだった神奈の表情が緊張したものにかわる。

『気付いたですか・・・』

『黒い奴につけられてるのだ』

双子達も既に気付いていたらしく、顔は動かさず目で尾行者の姿を確認している。

尾行者の姿は黒のレザーパンツにジャケット、そしてサングラスと見るからに怪しい滑降である。

『一応これを渡しておくです。』

ラズロットはそう言うのと、神奈に黒い剣の形をしたイヤリングを手渡した。

『これは？』

『この前の剣を改良して、普段はイヤリングの形で持ち歩けるようにしてみたのです』

あと、魔力制御のサポートもしてくれるから、ある程度自由に魔法が使えるようになるはずなのです。』

『魔法・・・使える?!』

イヤリングの説明を聞いた神奈は、キラキラした眼でイヤリングを見つめる。

その姿は、誕生日プレゼントを貰った子供そのものである。

『とりあえず着けてみるです』

ラズロットに言われるまま、神奈はイヤリングを耳に着けた。

その瞬間、彼女の頭の中にイヤリングが持っていた剣の使い方、魔法の使い方等々、大量の情報が流れ込んできた。

大量の情報を受け入れた彼女は、人差し指を立て、試しに指先に小さな黒い炎を作り出し、嬉しそうにそれを眺める。

『完全に危ない娘になってるわよ・・・』

その様子を見て、ラスティーが呆れている。

魔法が普通に存在する世界で生まれ育った彼女からすれば、魔法が使えるようになっただけでここまで喜ぶ神奈が理解できないのである。

『で、どうするつもりなの？』

不気味な神奈を放置して、ラスティーは双子に今後の対応を訪ねる。

『仕掛けて来るまで待つのだ』

リズロットは楽しそうに答えた。

どうやら、暇潰しとして楽しむつもりのようなのだ。

その様子を見て、ラスティーもニヤリと笑い、その方針に依存が無い事を伝えた。

辺境の鉄道の街
イゲルフェスト

『以上が、未開拓地域の管理を行う亜空間管理局に関する情報です。なお、ブリザッド運行管理局の治安維持部から、管轄内のブルーネで、2名のエージェントを確認したとの報告が先程ありましたので、各列車総隊に100編成程度の部隊をブルーネに派遣するよう要請しておきました。』

暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツ本社の総帥執務室では、サラ総元帥がフラウ総帥に現在の状況を説明していた。

『ありがとうサラ、あと新編中の第5列車総隊の状況は？』

『はい、旗車セントライナー号以下500編成全ての車輛が完成、現在乗務員の訓練中です。』

ただ、どこの車輛区に所属させるかがまだ決まっていません。1つの運行管理局の管轄に2つの列車総隊が存在するのはあまり好ましくありませんね・・・』

サラの言葉に、フラウ総帥は頷くとニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。

『じゃあ、新しい路線が必要だね』

未開拓地域の地図を指でなぞるフラウ総帥の様子を、サラ総元帥は、愛らしい年の離れた弟を見るような優しい目で見つめ、

『それでは、未開拓地域の侵攻プランを検討して参ります。』
と告げ、中央管制室に行こうとした。

その時、フラウ総帥は彼女を呼び止め小さな両手を差し出した。

しかも、満面の笑みで・・・

一緒に行くから抱っこしろという意味であるが、彼のその愛らしいそのすがたは、シヨタ趣味の彼女にとっては殺人的な破壊力を持った攻撃である。

その後彼女は、片手でフラウ総帥を抱き抱え、そしてもう片方の手に持ったハンカチで溢れ出る鼻血の処置をしながら、更に暴走寸前の本能を必死に理性で押さえつけつつ中央管制室に向かうのだった。

侵略者（前書き）

今回は、かなり暴走してます。

ちなみに登場する特急列車は、近 日本鉄道のビ タEXと、名古屋鉄道のパノ マカー（白帯）の亜空間軌道走行仕様です。

標準軌と狭軌に関しては、台車がフリーゲージ仕様になっていると考えてください。

侵略者

常闇の港湾都市群

ブルーネ

ブルーネ局地ターミナルステーションの特別ターミナルの乗り場に停車するキンダーガルテン号。

その横では、オレンジ色の車体に紺色のラインを纏った列車が出発しようとしていた。

この5両編成列車は1号車と5号車がシングルデッキの車輛で、2号車と4号車がダブルデッキの車輛、3号車がハイデッキの車輛になっている。

発車時刻が迫り、この列車の発車メロディー「ドナウ川の漣」が流れ始め、列

車はパンタグラフを下げる。

これから発車する電車が、パンタグラフを下げるというのはおかしいと思うかもしれないが、そもそも亜空間軌道に架線は存在しないので、普通の電車がそこを走るのは不可能である。

それを可能にしているのが、3号車の1階部分に装備されている大容量バッテリーユニットと、魔電変換器（電力と魔力を相互変換する装置）である。

ここから、亜空間軌道を走行するために必要な電力と、エアレールシステムを稼働させるための魔力を魔電変換器を通して供給する。

その関係でパンタグラフは、電化された通常軌道の架線からバッテリーの充電を行うための装置でしかないのである。

発車メロディーが終わり列車は、ヴィイイツつという車のクラクションのような電笛を鳴らし出発していった。

その後直ぐに、空いた乗り場には、次の前面が展望席で油圧式のダ

ンパーを左右に装備し運転席が2階にある特徴的なフォルムを持つスカーレットに白帯を巻いた列車がミュージックホーンを奏でながら入ってきた。

その様子を、眺めるリタのもとに、1人のプッペディナが駆け寄った。

『リター、もうすぐ留置線が空くみたいだよ。』

プッペディナの報告を受け、彼女はデータリンクでその詳細を確認して必要な指示をだす。

『では、10分後に留置線で方向変換してホームに戻りましょう。』

客車方式のため、折り返し運転ができないキンダーガルテン号がこのステーションから出発するためには、留置線で侵攻方向を逆にする必要があるのである。

『おお！お主はワシと同じ魔力式機械人形かえ？』

唐突に話しかけられ情景反射的に振り向いたリタの目の前には、眼をキラキラ輝かせた黒髪の人形少女が立っていた。

『魔力式機械人形とどの様な物かは存じませんが、私は電気／電子回路と魔力回路を組み合わせたハイブリッド方式のTC AI（Ir ain, Control, Artificial, Intelligence：列車制御人工知能）制御型魔導人形、オペテラシリーズ、製造番号04、オリジナルネーム「リタ」です。

つまり、この身体は列車制御システムの外部デバイスに過ぎません。』

リタは、自慢げにキンダーガルテン号の巨体を指差し、その少女に
いかに自分が凄い技術の結晶なのかを熱く語りはじめる。

こうなってしまうたら、もう止まらない。

延々とキンダーガルテン号とオプテラシリーズの自慢を機関銃の様
に語り続け、プリッペアは呆れた表情でその話を聞く事になる。

列車の方は、リタをホームに残したまま、方向変換作業を行ったが、
その所要時間20分の作業が終わってもなお彼女の話は続いていた。
プリッペアが、自分に似た存在とはいえ、それに不用意に話しかけ
てしまった事を後悔したのは言うまでも無い。

『・・・ところで、この列車は何処に行く予定なのじゃ？』

『この列車は、ブルーネ列車隊に護衛され、アーシエリアに向かう
予定です。』

『なんじゃと？』

何とか話を打ち切ろうと、列車の行き先を訪ねたプリッペアだった
が、予想外の答えに、表情を凍りつかせた。

『すまぬ、その事について詳しく教えてくれぬか！』

辺境の列車の街
イゲルフェスト

『ブリザッド運行管理局より、路線の渋滞で亜空間シールドマシン

の輸送に2時間の遅れが出ているとのことですよ。」

『他の輸送は？主に補給物資と、各列車総隊の列車だけど・・・』

『平均20分程度の遅れですので、補給や列車の補充が滞る心配はありません。ただ、侵攻予定をシールドマシン到着後1時間後に変更して頂ければ・・・』

『許可するよ。』

補給と補充が要だからね、あと各列車隊には、消耗率10%に達した段階で進軍を中断して、後退しても良いから後方の列車隊と合流してから進軍を再開するように徹底させてね。』

『ただか10%ですか？』

『10%も消耗するって事は、物量で押しきれて無いことになるからね。』

じり貧になるくらいなら、一旦下げて2倍3倍に増やしてから攻めた方が効率的でしょ。』

中央管制室の中央の席にはフラウ総帥が座り、各所に指示をだしている。

その傍らに立つサラ総元帥の鼻にティッシュが詰められ、顔色が悪いのはきつと気のせいだろう。

それは置いておいて、フラウ総帥は今回のアーシェリア侵攻を皮切りに、その周辺一帯も手中に納めるつもりようだ。

900編成にも登る大量の戦闘用列車の投入もそれを裏付けている。

「13年まえ、数編成の局地警備隊程度で壊滅的な被害を出した亜空間管理局さん、今回は合計900編成の第一線部隊・・・そして今回は十字教会の妨害も無い・・・どうやって切り抜けるのかなあ」

ブルーネに集結しつつある各列車隊のシンボルを眺め、フラウ総帥は無邪気にケラケラと笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6844o/>

[2]暗黒武装鉄道結社[シュバルツァークロイツ](辺境の章)

2011年10月7日18時10分発行